

計画の速やかな実行で目指す 人もまちも元気な健康都市！

ふるかわまさのり
古川雅典
多治見市長

まちづくりの中心は『市民の健康づくり』

平成25年3月、厚生労働省は「第1回健康寿命をのばそう！アワード」を開催し、高齢者の健康寿命を伸ばすための取り組みを積極的かつ独自の手法で実施している全国19の自治体・団体・企業への表彰を行った。市町村関係では6市が対象となり、多治見市が進める「『たじみ健康ハッピープラン』に基づく地域で進める喫煙対策」が優良賞を獲得した。

平成14年度～24年度まで実施された「第1次たじみ健康ハッピープラン」が終了、24年度中に策定された「第2次たじみ健康ハッピープラン」（平成25年度～34年度）が今まさに始まるうとしていたタイミングでの表彰は、市民の健康づくりをより積極的に推進しようとする多治見市にとって、大きな自信になったことだろう。

同時に第1次プラン実施期間のちょうど半

ばにあたる平成19年度に市長就任し、同プランに限らず、すべての事業・施策についての行動目標の「明確化・高速実現化」を全職員に求め、数々のテコ入れを行いながらマニフェストを実現してきた古川雅典・多治見市長にとっても、大きな成果、手応えの一つになった。

政策立案能力から、政策実行能力へ

「何事によらず、計画を作る際に私が重要視する眼目は『分厚いものを作ってはいけない』ということです。難しい言葉を使わず、数枚も読めば全容が分かる。シンプルな表現で市民に正確に伝わる計画が望ましい。そして計画づくりより重要なのは実行。プラス、その成果を必ず出すこと。ゲームメイクばかりしていないで、最後のシュートまで持ち込むということ。もっと言えば棒グラフになるような形で成果が明確に出ることが重要。思った通りの結果が出なかったら、その

原因を正確に検証し、委縮せず、次への教訓にする。何事も曖昧にしない。それが私の主義なのです」（古川市長）

例えば市民の健康づくりの場合、煙草を吸わない、野菜をバランスよく食べる、適度な運動・体操をするなどの要素は「市民にとって当たり前」のこと。そういった自明のことを長々説明する計画より「大切なのは、実現のための具体的な方策を示すこと」で、職員は実現に向けた「サポート役に徹するべき」と明快に語る。

そのような観点から、第1次健康ハッピープランにおいては、市民の死因で最多のガン



の中でも、地場産業である陶磁器産業に従事する市民が多いという地域性もあり、最も目立った肺ガン対策として、喫煙対策により力を入れた。

保健師が積極的に市民の禁煙集会や健康イベントなどに参加したり、ボランティアの市民とともに街頭で禁煙を訴える活動なども積み重ねた。そうした地道な活動が市民の喫煙率を目に見えて引き下げる効果をもたらし、冒頭で紹介した厚生労働省表彰に結び付いた。

第2次健康ハッピープランの策定に当たっては、第1次健康ハッピープランの実施状況についての評価および計画の見直しを行った上で、市民一人一人が健康づくりにより主体的に取り組めるような環境づくりのため、さらに多角的な工夫を凝らした。

例えば第1次プラン策定の際には、医師会や歯科医師会、高齢者団体など各種市民団体代表などによる策定会議に、市役所の関係各部署が参加。参加各団体が自ら設定した健康目標の達成を目指した。

その手法を踏襲しつつ、第2次プランでは策定団体を大幅に増やした。特に民間企業が新たに参加し、学校・保育園、市民団体なども大幅に加えて計31団体。そこに市役所の関係18部署が参加し、総勢60名で策定会議を構成。その経過や成果が参加団体以外の市民にも広く知られるように、大きく幅(間口)を広げた。参加団体は毎年度ごとに進捗状況を報告する義務を負うが、目標設定を「食生活分野」「喫煙対策分野」「運動分野」の取り組みに絞り、大人世代の喫煙対策を徹底的に行うとともに

に、朝昼晩の適切な食事と日常の適切な運動などにより健康増進を推進する。後に述べるように、この取り組みは学校教育など他分野の事業とも密接に連動し、結果的に市民全体の健康に資するような工夫がされている。

TGK48を発足

「健康プランは端的には医療費削減が最終的な目標になるわけですが、いわゆる病気をしない高齢者をたくさんつくるのが最大の目的ではない。元気な高齢者は地域の健康づくりの牽引役です。健全な地域生活は、健康やかな赤ちゃんが元気な子どもに育ち、元気な子どもが働き盛りの大人に育ち、その人たちが元気な高齢者になっていくという好循環によって生まれる。高齢化がますます進む状況においては、その循環の頂点であり牽引役



保健師や市民ボランティアの協働で禁煙運動



市民が積極的に市政を考える「たじみ市民討議会」



市内各所に見られる美濃焼のオブジェ



修道士を養成する神言会多治見修道院

であるべきは、元気な高齢者の皆さんなので「す」(古川市長)

市長はその牽引役たる元気な高齢者をさらに象徴する存在として、T G K 48という名称のユニットを近々発足させる予定だという。Tは「たじみ」、Gは「元気」、Kは「高齢者」の頭文字を表す。

「第2次たじみ健康ハッピープランの実施過程で、元気と健康を保っておられる高齢者を募ってAKB48のようなユニットをつくり、格好いいユニフォームを着てもらい、さまざま

まな健康イベントなどで歌ったり踊ったりしていただくつもりなのです」(古川市長)

多治見市には先ごろ亡くなったアンパンマンの作者、やなせたかし氏デザインの《うながっば》という人気のイメージキャラクターがある。加えてT G K 48が発足すれば、元気な高齢者アイドル・ユ

ニットとして、市民が健康寿命を目指す際の目標・象徴となるような、ニュータイプのイメージキャラクターに育つ可能性もある。

「どんな事業もまずは市職員自身がスピード感を持って結果を目指し、楽しみながら取り組むのであれば、市民のやる気は喚起できない」とする古川市長。T G K 48に見られる大胆なアイデアと発

想力は、近年の多治見市が実施する、さまざまな分野における特徴的な事業にも色濃く反映し、同時にすべてが連動している。

教育環境岐阜県 No.1

例えば古川市長の就任直後、平成20年度から始まった事業に、小学校の授業および幼稚園・保育園の遊び(いきいき遊び)への「脳活(脳トレ)」の導入がある。ゆとり教育の実施以降、盛んにいわれるようになった学力低下への対処という意味もあるが、より以上に、子どもたちの基本的な思考力、集中力、知識、判断力、理解力などの能力を高めるために、

児童生徒の伸びを褒めることで自尊心を高め、学習への興味や関心を喚起するプログラムを導入したのだ(脳トレソフトを主にPCで活用)。

ゲーム性のある学習(遊び)プログラムを組み、スピード感に富んだ学習を展開する。そのため、児童生徒が間違えて答えたとき、そ



手足と尻尾がウナギで体が河童、多治見市のイメージキャラクター「うながっば」(やなせたかしデザイン)

の都度丁寧に答えを正すことより、毎日の繰り返しの中で定着を図っていくことを目的とする。そのため、些細なミスに気にしながら消極的に学習に参加するのではなく、間違えを恐れず、自信をもって学習に参加できる児童生徒を育成できる。そして正答したら教師がみんなの前で必ず、明るく褒める。そのことによって児童生徒や園児たちは「自尊心」が高まり、級友たちの中の自分の存在感(自己肯定感)を自覚し、集団への参加意欲や学習への意欲が自ずと沸いてくる。

これには褒め方も問われる。褒めるタイミングが重要だし、的確に速やかに褒めれば、児童生徒も気付いていなかった自分の良さを気付かせてあげることにもつながる。そういう意味で、教師の力量が問われるし、鍛えられもする。教師自身の脳活(脳トレ)でもあるといえる。

教育委員会での取材の際、授業中に席にじっとしていらなかった発達障がい児が、この脳活学習への参加によって得意なプログ



全市挙げた防災体制の一翼を担う女性消防隊(平成25年発足)

ラムを見つけ、きちんと座って集中するようになった様子を記録した、感動的な動画を見せていただいた。この子は脳活学習によって、クラスの仲間と一緒に学習に参加でき、集団に適應できるようになった(周囲の健常児もその子の良さを再認識した)。

今後この分野での脳活学習の新たな可能性の模索も期待されるが、普通級の児童生徒たちには脳活学習実施数年後、IQが全国平均(100)を超えた小学校(6年生の平均が国立大学学生の平均120を上回るケースも)が続出するという効果があった。その結果と連動し、平成25年4月実施の「全国学力・学習状況調査」(小学6年、中学3年対象)では、

国語・算数(中学は数学)共に平均正答率が全国平均、県平均ともに大きく上回り、従来以上の好成績となった。

子育てと親育ち

また平成24年度から、多治見市は小学校および幼稚園・保育園において、「体トレ」(子どもの健康・体力づくりたじみプラン)も実施し始めた。子どもたちが将来、社会に適應して生きていくのに最も必要な能力の一つは、どのような変化にも対応できる臨機応変な判断力だろう。それは頭の働きと体の働きがフィットしていないと発揮できない能力でもある。

「多治見市では平成20年度から実施した脳



美濃焼の里・多治見のシンボル道路「オリベストリート」

活学習で、子どもたちの集中力や学習能力が上がってきた反面、平成23年度までは体力テストをすると全国平均、県平均を下回るという傾向がありました。そこで脳活学習と同様に、楽しく体力アップが図れる多彩な運動プログラムをつくり、上達したらランクを上げて大人たちが褒めてあげるというような手法を作ったのです(古川市長)

具体的にはラジオ体操の推進、学年ごとに縄跳び・水泳などの標準記録を作成する(「たじみ運動技能スタンダード」(小学校)、1日に特定の時間を決めて運動タイムを設けるなどの運動関連の取り組みはもちろん、子どもたちに毎朝の朝食をきちんととらせるよう各家庭にお願いするなど、日常生活面からの改



まちの将来を考える「子ども会議」



日本一暑いまち・多治見の夏を涼しく過ごすクールアースデー

善も行った。

そのほか、取り組みは多岐にわたるが、初年度で早くも結果が現れた。全国共通の体力テスト各種目のうち、上体起こし、シャトルラン、立ち幅跳び、反復横跳び、50m走など多くの種目で全国平均・県平均に並ぶか凌駕するようになったのだ。

適切な動機付けと指導があれば、子どもたちの学力も体力もすぐに向上することが、多治見市のこうした事例で改めて分かる。

多治見市には一方で、平成21年度から実施の「親育ち4・3・6・3たじみプラン」という事業がある。4は妊娠中から3歳までの4年間、3は子どもが3歳から6歳までの3年間、6は小学生時代の6年間、最後の3は中学生時代の3年間を表すもので、そうした区切り

を意識しながら、子どもとともに親の自発的成長をも促すことを目的とする「親支援」事業だ。有識者、臨床心理士、PTA役員、小中学校代表、保育園・幼稚園代表などからなる「親育ち支援委員会」が中心となって、子どもの成長過程に応じた親支援のためのさまざまなイベントや講座などを実施し、好評を得ている。

平成22年4月、公設民営化された市民病院（二次医療）を中心に、多治見市には充実した一次医療（プライマリケア）、三次医療（県立病院）との連環による県下有数の医療環境が構築されつつある。そしてこれまで述べてきたように、元気な高齢者や子どもを幅広くむ環境づくり、子育て世代の親を支援する環境づくりなど、市民の暮らしやすさを追求する事業が多方面から、全世代を対象に同時並行で進められている。残る最大のピースは雇用環境の拡充だろう。

企業誘致の切り札は「人が育つまち」、「本物があるまち」

雇用環境の拡充という意味で、最も手っ取り早く効果的なのは企業誘致だ。現在、全国の自治体がこれについては苦慮しているが、多治見市には近年、大企業の進出が相次いでいる。中でも日本最大級の規模と1000人以上の雇用が見込まれる、アマゾン・ジャパンの物流センター「アマゾン多治見フルフィ



幼保職員も総出で防災訓練

ルメントセンター」や、トヨタの国内外の販売店サービススタッフの人材育成および車両技術の研究・開発を目的とする「トヨタ多治見サービスセンター」（毎年5000人前後が見学）が、世界各地から研修を受けにくる）が、いずれも昨年からは多治見市に進出、稼働し始めたニュースは、企業誘致に悩む全国の自治体関係者から大きな注目を集めた。

その背景には名古屋都市圏が至近に位置し、中部国際空港とは1時間強、大阪都市圏・東京首都圏とも新幹線・高速道路で直結する交通便利性はもちろん、1300年余りの歴史を誇る美濃焼が象徴する、セラミック関連の産業が培ってきた工業都市としての潜在力があり、3つのテクノパーク（工業団地）とフロンティアリサーチパークが市内に点在する



美濃焼の歴史をしのぼせる登り窯（人間国宝・荒川豊蔵氏の親族が運営する水月窯）

という環境的優位性がある。さらに見逃せないのは、多治見市が歴史的に人財の宝庫であった事実だ。

「多治見市には美濃焼の関係で人間国宝がこれまでに4人、誕生しました（現存は2名）。700年以上前に創建され、国の名勝指定を受けた庭や2つの国宝指定の御堂をもつ虎渓山永保寺は、現在に至るまで臨済宗南禅寺派の雲水の修行の場として機能してきました。また80年ほど前に建造された神言会多治見修道院も、一貫してカトリック系神学生の修行の場であり続けています」（古川市長）

これらの事実はいずれも、多治見市の豊かな自然環境や地理的環境、歴史文化的環境の持つ優位性を物語るものだが、企業誘致が最終局面となり、市長によるトップセールスの



作家や陶磁器技術者・デザイナーを養成する多治見市陶磁器意匠研究所・卒業制作展風景（セラミックパークMINO）

段階に至ったとき、市長は自らの地域特性の「切り札」として、こうした人財育成の場になり続けてきた歴史を説明するという。企業誘致は客観的なハード面の条件や手厚い助成制度などとともに、歴史文化が培ったソフト面の環境要素などが意外に大きな効果を持つ。特に立地条件が甲乙付けがたいときは、地域が備える「人の育ちやすさ」などのエピソードや歴史的事実が「ご縁」となるケースはよくあるものだ。

人財育成最優先 『カム・バック・サーモン』

これまで見てきたように、多治見市が近年進める独自の取り組みは、健康も教育も、医療も

子育ても、すべてが連動しながら最終的に「人財育成」に結び付いているのが特徴といえる。

「すべての人材は、適切に磨かれれば地域の財産である『人財』になる、というのが私の持論です」（古川市長）

さらに企業誘致の結実化で、多治見市で生まれ育ち、大学進学や就職でいったんは外部に出ていった若者が、また故郷に戻ってくるための受け皿もできつつある。多治見市では今、子どもたち、若者、子育て世代、働き盛り、高齢者などの各世代がそれぞれ人財となり、地域で元気に暮らしている循環が、少しずつではあるが整おうとしているのだ。

※多治見市は、「一人、一人、一人が財産、宝である」との考えから、人材ではなく、人財と表記する。

（取材・文 遠藤 隆／取材日平成26年2月13日）



雲水の修行の場・創建700年以上の虎渓山永保寺